

和衷協同

スタッフ全員が同じ志のもと、力を合わせて医療に取り組んでいる、各地の医療機関を紹介します。



函館市の函館おしま病院(福徳雅章理事長・五十六床)は、市内でも数少ないホスピス病院として、緩和ケア病棟二十床を運用。「ホスピスの心は医の原点」の考えのもと、「抑制廃止」宣言をするなど、ホスピスマインドで地域医療を支えている。

十六床で運営していた「函館渡島病院」をリニューアルし再スタート。十六年に、医療療養病床を二十床の緩和ケア病棟に転換した。現在、医師三人体制で運営している。福徳理事長は、昭和六十一年に金沢医大卒業後、九州で最初にホスピスを導入した福岡県の栄光病院に勤務。内科診療と並行してホスピスでの医療を三年間学んだ経験を携

函館おしま病院 (函館市)

え函館に帰郷。市内の病院で勤務する傍ら、「道南・生と死を考える会」などで活動していたとき、後継者を探している同病院を知り、「ホスピスを開設することができると」と、理事長就任を引き受けた。

「抑制廃止」の取り組み推進
ホスピスマインドによる病院運営のほか、福徳理事長がもう一つの柱に据えるのは、入院患者の「抑制廃止」だ。言葉や薬を含め、人間としての尊厳を否定する抑制の廃

スの心が医療、看護の原点との思いから、「癒し癒される心からの医療」を掲げ、全病院を挙げてホスピスマインドによる医療提供を開始した。

止は、「ホスピスマインドにもつながら」ことから、職員一同が、常に意識するよう心がけるほか、院内を常に公開。地域への周知も進める。

ホスピスを「最後までその人らしく生きるための場所」と捉え、民間療法も否定せず、患者、家族の希望をできる限り聞き入れるスタンスで運用する。

緩和ケア病棟を開設した当時、市内にホスピスを持つのは一施設のみ。その施設も開設間もないことから、「市民をはじめ医療関係にもホスピスに対する理解はあまり無い状態」だったという。

病棟は、家庭的な木の温もりを随所に使うなど、「人生最後の時間をゆったりと穏やかに過ごせるよう自宅にいるような外観・内装」を意識し、ベットとの面会も許可。ファミリーキッチンや宿泊ができる家族室なども配備した。

現状について福徳理事長は、地道な努力で他施設や市民の理解・評価が得られるなど、「ある程度、基礎が固まってきた」と手応えを感じている。

家族のグリーフケアにも力を入れ、毎年実施する遺族向けの追悼イベントのほか、毎月最終土曜日には遺族の茶話会を開き、心のケアに取り組

その一方で病院の運営面では、包括医療が大きなネックになっており、ホスピスマインドを徹底し、「患者に手厚いケアをやればやるほど赤字になる」など、厳しい一面も。また、介護療養病床の看護



家族も宿泊できる特別室

師の定着率が不安定で、緩和ケア病棟開設時から尽力した病棟看護部長が、昨年秋季に退職するなど、「小所帯の病院だけに、スタッフ一人ひとりの動きで、全体に大きな影響が出てしまう」と当惑する。

緩和ケア地域 ネット連携強化

地域ネットワークの充実には欠かせない」と考えており、市内に二つあるがん診療連携拠点病院をはじめ、在宅を担う診療所などのさらなる連携強化を一つの鍵と指摘。福徳理事長は、道南在宅ケア研究会会長も務めていることから、「興味を抱いてくれる診療所との連携を切り口に、さらにネットワークを強化していきたい」と展望する。